

「心の声」が 聞こえますか

“子どもはかわいいし、大事にしたい。
でも子育ては大変！”

子育て中は、ときにいらだちさえ感じるこ
ともあるでしょう。親が自分を見失わずに
子どもと向き合うには？



叱り続ける毎日



「ゆうすけ勇介、早くしないと幼稚園バスが来ちゃうよ。もう着替えたの?」

「まだー」

「早くしなさい! 遅れるわよ」

今朝も母親の美里さん(32歳)は、幼稚園の送迎バスの時間がせまっているのに、登園の準備が終わらない勇介くん(5歳)に声をかけました。

そんな美里さんの心配などお構いなしに、勇介くんは弟の俊くん(3歳)とふぎけながら着替えています。時計の針がまた数分動きました。美里さんのイライラは募るばかりです。

「もう! いい加減にしなさいよ! 幼稚園に行かないの?」

「行くよ」

「だったら早く着替えなきゃだめで

しょ！」

「……今、やってるよ」

「やってないでしょ！ さつさと着替えなさい！」

「……」

勇介くんはしょんぼりしながら、着替えを済ませました。

美里さんは、勇介くんと俊くんの手を引いて、送迎バスの停留所まで小走りで

向かいました。

停留所に着くと、すぐにバスがやってきました。バスは勇介くんを乗せると、またすぐに走り出しました。

「ふー。まったく、いつもこうなんだから。どうしても毎朝同じことで叱らなくちゃならないのよ。もう我慢の限界だわ」
バスを見送る美里さんの心はもやもやしていました。

生きている——それだけでよかったのに

私たちは子どもが誕生するとき、「無事に生まれてほしい」と、ただそれだけを祈ります。元気な声で泣くわが子を胸に抱くと、「ああ、よかった」と、わが子が

生きているだけで感謝と喜びに満ちた気持ちになるでしょう。

そして「這えば立て、立てば歩めの親心」といわれるように、日々手塩にか



け、子どもの成長を楽しみにします。どのような労力も時間も、子どものためなら惜しまないでしょう。そして何

の見返りも求めません。親は子どものために犠牲を払っても、それが喜びになります。

子どもは成長して、言葉を覚え、自我が芽生えてさまざまなことに興味を持ち、いろいろと行動し始めます。すると、このころから、親の気持ちは少しずつ変わっていきます。

それまでは親の思い通りにし、言うことを聞くかわいい子どもであったのが、



親の思い通りに動かないで、親が困るようなことばかりをしでかす子という受けとめ方をしてしまいます。

最初のうちは、それもかわいいさのうちと済ませることができますが、やがて「困った子だ」「手のかかる子だ」「生意気だ」「子育ては面倒くさい」というような感情が、親の心に芽生えてくるものです。

そうした中でも、どうしてもしてはいけないこと、危険なことは、厳しく教えなければなりません。また、集

団行動の準備のために、ある程度、身の回りのことは自分でできるように



教えておかなければならないでしょう。
このように、幼児期の子どもと向き合うことは、思いのほかエネルギーを必要とします。

親は、自分の心をよく見詰め、感情を上手にコントロールしながら、子どもと向き合っていないかと、ときに自分を見失ってしまうことがあります。

「どうして私が「じめん」なの?」

一月のある日、暖かい陽気に誘われ、美里さん一家は車で二時間ほどのところにある水族館に出かけました。

夫の博さん(37歳)の運転で車を走らせ、水族館に着くと、勇介さんと俊くんは、珍しい魚を見て大はしゃぎです。家族で楽しい時間を過ごしました。

美里さんは帰りがけに、魚の形をした

風船を子どもたちを買ってやりました。二人は、うれしそうに風船の糸を握りながら、車に乗り込みました。

車が走り出してから数分後のことです。後ろの席に座っていた勇介さんと俊くんが、お互いの風船をぶつけ合っ**て遊**び始めました。ところがそのうち、

「ママ、ぼくの風船と俊ちゃんの風船の



ひもがぐちゃぐちゃになっちゃったよ。
とれないよ！」

と、さわぎ始めました。

美里さんが助手席から振り向くと、二つの風船の糸が巻きついていました。

「もう、しようがないわね。とつてあげ

るから貸してごらん」

美里さんは、絡まった二つの風船の糸を少しづつほぐし始めました。

ところが、ほぐしている途中、勇介くんの風船の糸が切れてしまい、風船は車の窓から外に出て、あつという間に空高く飛んでいってしまいました。美里さんは、車の窓を開けていたことを、すっかり忘れていたのです。

「あーっ、ぼくの風船！ ……ママのバカ！ ママのせいだ！ えーん」

勇介くんは、美里さんを責めながら声を張り上げて泣き出しました。

「勇介、ごめんな」

運転中の博さんが、思わず勇介くんに声をかけましたが、泣き声は大きくなるばかりです。

「ママも、ごめんなさいは？」

弟の俊くんが美里さんに言いました。

「そうだよな。ママも謝らなきゃいけないよな」

博さんまでも美里さんを責めています。

「どうしてママだけが悪いのよ！ 勇介たちが風船の糸を絡めてしまうからいけないよ」

ないんでしょう！ 何よ、風船くらいで。我慢しなさい！」

自分ばかりが責められてしまった美里さんは、結局、謝らないで一方的に勇介くんを説き伏せてしまいました。車内には、勇介くんのすすり泣く声だけがしばらく聞く聞こえていました。

私は何も悪くない！

いつしか、勇介くんは泣き疲れ、そして隣に座る俊くんも、遊び相手がいなくなったためか、やがて二人とも眠ってしまいました。

「どうしてあなたは、いつも子どもたちの前でいい格好をするのよ」

美里さんは運転中の博さんに話しかけました。

「君は、どうして子どもに『ごめん』くらい言えないんだい？ 君は、いつも子どもたちが悪いことをしたら『謝りなさい』って言っているだろう」



「あたりまえでしょう。いつも悪いのは子どもたちなのよ。私は悪くないわ。それなのに、ふだんの私の苦労も知らないで、いつも子どもたちの味方ばかりするあなたなんか大嫌いよ」

美里さんは、このときとばかり、思っていたことを口走ってしまいました。

「どういうことかい？ ぼくがいつも子どもたちの味方ばかりしているって？

いつのことを言ってるんだ。ぼくはいつも公平に考えて、どちらが悪いかを言っ

ているだろう！」

売り言葉に買い言葉。美里さんの言葉が、いつも冷静な博さんの逆鱗げきりんに触れたようです。声も次第に大きくなり、口調くちようも激はげしくなってきました。

「そんな大声を出したら、子どもたちが起きるじゃない」

「起きたって仕方がないよ。だいたい君が言い出したことじゃないか。どうしてそういう言い方をするんだ。せつかくの休みに、楽しくみんなまで出かけたのに、ぶち壊こわしだ！」

博さんの運転うんぱんが乱暴らんぼうになつてきました。美里さんは、それ以上の口論こうろんになるのを避さけました。しかし、それから家に帰り着くまで、博さんはひと言も口をききませんでした。

心の声？



博さんは、翌朝も昨日のことを引きずっているようでした。朝食を済ませると、そそくさと会社へ出かけてしまいました。美里さんが、玄関で「行ってらっしゃい」と声をかけて見送つても、無視をして出ていきま

した。
美里さんにとっては、気のめいるような一日のスタートでした。

勇介くんを幼稚園に送り出した美里さんは、俊くと近くの公園に立ち寄りま

した。
「わあーっ、遊んでいいの！」

「うん……」

いつもは朝食の片づけや洗濯物があったて、寄り道せずに家に戻る美里さんでしたが、この日ばかりは、家に帰りたくない気分だったので。

まだ誰もいない公園を独り占めして走り回る俊くんの姿を見ながら、美里さんはしばらくぼんやりとしていました。



すると、公園に俊くんと同い年の孝く
んがやってきて、いっしょに遊び始めま
した。気がつくと、孝くんのお母さんが
美里さんの近くまで来ていました。

「おはようございます！ 俊くん、きよ
うは早いですね」

「ええ。いつもは家の片づけに帰るんで
すけど……」

俊くんと孝くんは、しばらく前にこの
公園で会い、遊び始めるうちにとても仲
良くなりました。子どもどうしの縁えんで、
美里さんも孝くんのお母さんと親しく
なっていました。

ふと見ると、孝くんのお母さんは一冊
の本を持っていました。聞いてみると、
孝くんのお母さんのお気に入りの本なの
だそうです。

美里さんは、その本を見せてもらい、
何気なく開いてみました。すると、目に
とまったページがありました。

いたそうね

ぼくが くりのいがいがを

手でもつたら とても

いたかったよつて

ママに話したら

ママが

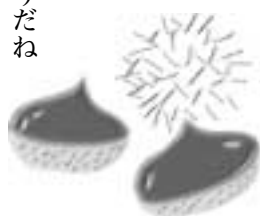
いたそうねつて

顔をしかめた

ママつてかわいそうだね

おはなしをきいただけで

いたくなるなんて



（川崎洋編『おひさまのかけら』中央公論新社）



美里さんは、孝くんのお母さんからその本を借りて帰ると、家事の合間あいまに読ん

でみました。

その本には、子どもの「心の声」がいくつも綴つづられていました。日頃、親が子どもに話しかける何気ない言葉や表情などから、子どもは親の思いや自分に向けられた親の気持ちというものを、子どもなりに敏感びんかんに感じとっているのです。

「着替えが遅い勇介——。いつもママに叱られてばかりで、どう感じているんだろう」

「風船を車の窓から飛ばしてしまったとき、勇介はどんな気持ちで泣いていたんだろう」

勇介くんの悲しみや不安に共感する気持ちだが、美里さんの心に湧わいてきました。その心は俊くん、博さんへも広がっていききました。

友からの 手紙



昼食を済ませると、

しばらくして俊くんは

昼寝を始めました。美

里さんにとっては、俊

くんが昼寝をしてい

る、ほんのわずかな時

間が、一日で唯一の自

分だけの時間でした。

美里さんは、午前中に届いていた郵便

物に目を通し始めました。すると、高校

時代の同級生、優子ゆうこさんから久しぶりに

手紙が届いていました。

優子さんは、美里さんと中学、高校を

通してずっといっしょに学校に通った親

友であり、良い意味でのライバルでした。

優子さんは美里さんより一年早く結婚

しました。ご主人は、古くから豆の加工

品を製造・販売する老舗しよせの長男です。従

業員も二十人ほどいます。優子さん自身

も結婚してすぐに店に出て働き始めまし

たが、サラリーマン家庭の長女として

育った優子さんにとっては、何かと大変

なことでした。

そうした中でも、仕事の大変さや子育

ての悩みなどを、美里さんと文通してい

たのです。

優子さんからの手紙には、友だちや仕

事のことなどが書かれてありました。そ

して、そのあとの内容を読んで、美里さ

んは胸を締めつけられるような思いがし

ました。

——五歳の娘は、月に二回は熱を出し、

そのつど保育園を一週間休みます。そのた



びに私も仕事を休まなければなりません。
そんなはらはらした生活の中、今月に入って二回目の熱が出ました。体温計を見るなり、私は「やっぱりまたお熱！」と叫んでしまいました。

「また仕事を休まなきゃ」という思いが先に立ち、娘のことは考えずに何気なく

口から出た言葉でした。

すると、しばらく私の顔を見ていた娘がつぶやきました。

「お母さん、またお熱でごめんね」

私は、ハッとわれに返ったように思いました。胸がどきどきして涙が止まりませんでした。

今まで、熱のたびに娘に辛くあたっていた自分を情けなく思いました。ずっと耐えていた娘に申し訳ない気持ちでいっぱいでした。

病気の娘を守ってあげられるのは母である私だけです。自分の都合ばかり考えていたことを詫びながら、娘をぎゅっと抱きしめました――

美里さんは、優子さんが仕事を持ちな

自分の心を見つめながら

から、子育てに懸命けんめいになつてゐる姿を思い浮かべ、胸が熱くなりました。

以前、勇介くんが誕生したとき、お祝いに来てくれた優子さんが、「同じ年ね。いい子を育てようね。これからはがんば

幼稚園から帰つた勇介くんを、美里さんは、思いきり抱きしめてやりました。汚よごれた手で鼻の下をこすつたのでし

う。ひげのような黒い跡あとをのこして、「苦しいよ」と言いながらも、うれしそうに笑う勇介くんを見てみると、とても幸せな気持ちでした。

「勇介、このあいだは大事な風船を飛ばしてしまつてごめんね。あのとき、とても悲しかったでしょう」

そんな美里さんの言葉に、こくりとう

ろうね」と励ほげましてくれたことを思い出していました。

「優子、いつしよにがんばろう！」
美里さんは、心の中で親友に向かつて叫んでいました。

なずいただけで、にこにこ笑つてゐる勇介君でしたが、美里さんには、

「いいよ。ママはわざとやつたんじゃないもんね」
という声が聞こえたようでした。

その日の夜、博さんは、遅くに帰つてきました。美里さんの予想したとおり、家に帰りづらく、同僚どうりょうと飲んで帰つてきたのでした。

「お帰りなさい」



「……」

美里さんは、博さんの好きなお酒と肴さかなをつくって待っていました。

「寒かったでしょう。お酒、あたためるわね。それとも風呂にする？」

それを聞いて、博さんはほぐれた表情を浮かべ、テーブルにつきました。

「そうだね、せっかくだから少し飲み直したいとか」

と言って、いつものように穏おだやかに美里さんの話を聞いてくれました。昨日のできごとなど、まるで忘れたかのような博さんでした。そして、「来月にでも、優子さんに会いに行ってきたらどう？ 子どもたちの面倒は僕ぼくがみるから」と言ってくれました。

そのとき、美里さんには博さんの心の

声が聞こえました。

「昨日は少し言い過ぎたよ、悪かった。子育ては僕もできるだけ手伝うよ」

翌朝、幼稚園に行く時間になっても、勇介くんはお気に入りのおもちゃで遊んでいます。いつもなら、イライラして勇介くんを叱りつける美里さんですが、この日は少し違っていました。

美里さんは勇介くんの前にかがみ込むと、勇介くんと目と目を合わせながら言いました。

「ねえ勇介、早く着替えて、ママをびっくりさせてよ！」

それを聞いた勇介くんは、遊んでいたおもちゃを片づけると、うれしそうに着替えを始めたのでした。